

【69】柴井堰とビーバーのダム

当協会の月刊誌「河川」の昨年 12 月号の記事に、鹿児島県の一級河川「肝属川」（きもつきがわ）の支川に“日本で唯一の柴井堰”というふれこみで「川原園井堰」のことが紹介されています。「井堰」という用語は、農業用水の世界の言葉のようで、井戸とは無関係で、取水のために川の流れを堰き止めたり堰上げたりする普通の堰のことです。

現代ではコンクリートや鉄を使うところですが、江戸時代の伝統的工法では、土砂をアンコにして表面を石張りにしたものや、「蛇籠」（じゃかご）といって、竹を細く削ったものや植物の蔓などで網状に編んだ細長い籠に石を詰めたものを並べたもの、そして樹木の枝や灌木を束ねた粗朶（そだ）や柴を並べたもの、など天然自然の材料を用いて堰をつくりました。

柴井堰や柴堰は、川の横断方向に渡した横木に柴を壁状に立てかけて流水を通りにくくし結果として堰き止める効果を出した堰のことです。以前は各地に存在したようですが、伝統工法で技術を伝える人が居なくなってきたこと、洪水で流されやすく毎年のように造り替える必要があること等から時代とともに廃れてゆき、「川原園井堰」が日本で唯一（？）残されたというわけのようです。

この記事を読んで私が反射的に連想したのはビーバーのダムのことでした。ビーバー（beaver）というのは、北米やヨーロッパの北方の森林地帯の沼沢地や湿地に棲む、カワウソや大型のネズミのような格好の哺乳類ですが、小河川や溪流に高さの低いダム（わが国では堰に分類）を造ることで知られています。ビーバーはその鋭い歯で樹木をかじり倒し、それらの木や枝を上手にかみ合わせたり、並べたりして堰にします。このとき石や泥土も用いて材料の木を固定したり、隙間を埋めたりと芸の細かいこともするとのこと。

もっとも彼らの堰を造る目的は取水ではなく、堰上流の土地に河川水を氾濫させて池（ダム湖？）をつくり、その中にクマやオオカミなどの外敵を避ける彼等の巣、水上住宅を設けることです。

人間と野生動物の行動に類似点はいくらかもあるようですが、こういう技術的な才能まで類似しているとは全く不思議な話しです。